

# 青年期の子どもイメージ・育児イメージ及び養護性に関する研究

礪波 朋子

## 問題と目的

近年、非婚化や少子化が進み、子育ては誰もが経験する当たり前のことではなくなっている。

そのような社会変容の中で、子育てに関わる問題も深刻化している。厚生労働省（2012）による平成23年度の児童相談所における児童虐待相談対応件数によると、全国206か所の児童相談所が児童虐待相談として対応した件数は59,862件（速報値）で、これまでで最多の件数となっており、虐待件数は年々増加傾向にある。

また、育児不安を訴える親も増加している。原田（2006）は、子育て実態調査で、「育児のことで今まで心配なことがありましたか」という育児不安についての質問に対し、「しょっちゅう」心配だったと答えた10ヵ月児、1歳半児、3歳半児を持つ母親の割合が、1980年の調査では6～7%であったのが、2003年の調査では13～14%と、ほぼ倍に増加しており、一方「あまりなかった」と答える親は34～40%から26～27%と減少していることを報告している（原田，2006）。また、同調査で「子育てを大変だと感じますか」という問いに対して「はい」と回答した親の割合は、4ヵ月児で49%、10ヵ月児で59%、1歳半児で64%、3歳児で63%と過半数を占めており（原田，2006）、親が育児に困難を感じる時代になったといえる。育児不安に関する要因の一つとして子育て経験が挙げられる。原田（2006）の報告では1歳6ヵ月児健診時に行った2003年の調査で「育児のことで今まで心配なことがありましたか」という問いに対して「あまりなかった」と回答した割合は、第1子の母親の場合18.5%であったが、第2子の母親では31.7%、第3子の母親では44.1%であった。1人目と2人目以降の子育てでは、不安を感じる母親の割合に違いがみられており、特に初めての子育てでは育児不安を抱える母親が多いといえる。育児不安・育児ストレスを抱える母親は増加傾向にある一方で、子育て経験の有無が母親の育児不安に影響していることが示されている。

育児不安・育児ストレスには、子育て経験以外にも様々な要因が関係していると考えられる。桑名・細川（2007）は、1歳6ヵ月児を持つ母親を対象に、育児ストレスとその関連要因（母親としての自己認知、夫への役割期待、母親役割受容など）について質問紙調査を行った。その結果、「親自身に関わるストレス」には、母親役割の消極的・否定的受容が最も強く関連し、次いで夫の育児への関わりに対する不満、母親役割イメージと自己とが一致しないこと、第1子であることが関連していた。また、「子どもの特徴に関わるストレス」には、母親役割の消極的・否定的受容が最も強く関連し、つぎに第1子であることと関連が強かった。さらに、母親役割イメージと自己のイメージとが一致しないものは、親自身にかかわるストレスを高めるように影響し、父親役割イメージと夫とが一致しないものは夫の育児への関わりへの満足感を低め、満足感が低いことは親自身に関わるストレスを高めるという結果が示されている（桑名・細川，2007）。以上の結果より、育児ストレスに関わる子育て経験以外の要因として、母親自身の自分に対する認識と共に、父親の育児参加が挙げられる。

そこで、次に、父親の育児に対する関わりと育児不安との関連について検討する。

原田（2006）は、2003年の調査で「お父さんは育児に協力的ですか」という質問に対し「はい」と答える率は67～78%と20年前の調査と比べて倍増しており、育児に協力的な父親が大幅に増加しているといえると指摘している。また育児についてよく話し合っていると感じている母親も大幅に増加しており、男性が育児に協力的な方向に変化してきているといえる（原田，2006）。一方で、子どものことは母親任せになっている父親の率は20年前と変わらず4人に1人くらいおり、そのような父親は、育児に協力的でなく、夫婦で話しあうことも少なく、また子どもと一緒に遊ぶことなく、子どもは父親に寄り付かないなどの傾向がみられることも指摘している（原田，2006）。また、原田（2006）は、父親が相談相手になったり、頼れる

相手になったりすることにより、母親の育児に対する不安が軽減し、母親が育児を肯定的にとらえることができるようになるであろうと述べている。

さらに、荒牧・無藤（2008）は、未就学児を持つ母親の抱く育児への否定的・肯定的感情とその関連要因について質問紙調査を実施した結果、育児への「負担感」や「育ちへの不安感」は夫からのサポートが多いほど低く、育児への「肯定感」は夫からのサポートが多いほど高いことを明らかにしている。

つまり、父親の育児への参加が母親の育児不安やストレスを和らげると考えられ、実際になんらかのかたちで育児に参加する父親が増加しているといえるだろう。

厚生労働省では、2010年6月より、男性の子育て参加や育児休業取得の促進等を目的とした「イクメンプロジェクト」を始動した（厚生労働省、2010）。「イクメン」とは育児を積極的にする男性のことを指し、昨今メディアで頻繁に取り上げられるようになったが、まだまだ一般的でないのが現状である。そこで、「イクメンプロジェクト」では、「イクメンとは、子育てを楽しみ、自分自身も成長する男性のこと。または、将来そんな人生を送ろうと考えている男性のこと。」と定義し、「イクメンがもっと多くなれば、妻である女性の生き方が、子どもたちの可能性が、家族のあり方が大きく変わっていくはず。そして社会全体も、もっと豊かに成長していくはず」と謳っている。

先述したように、母親の育児不安や育児ストレスを軽減するためには、父親のサポートが重要である。

育児に前向きに取り組み、妻をサポートする父親になるためには、男性にも主体的に子どもを育てていこうという態度にいたる準備状態が必要であるといえる。

親としての資質ということを考える際、女性の場合は「母性神話」が問題となる。大日向（2000）が、「産む能力イコール育てる能力」といった考え方や、母親はいつでもやさしく慈愛に充ちた聖母のようであるといった考え方など、いまだに「母性神話」が歴然と残っていると述べている。しかし、原田（2006）が指摘しているように、母性は育つものであり、母親の持つ母性性が発揮されるためには、適切な環境が必要である。

近年、親となるために教育・学習の重要性が指摘されるようになってきた。また、伊藤（2003）は、親と

なることが身近にせまっている青年期後期の親性の未熟さが問題視されるに伴い、青年期前期からの親性準備性の育成が必要であると指摘している。

岡本・古賀（2004）は、1980年以降、心理学・医学・教育学の分野で、子どもに対する親としての役割を遂行するための資質、つまり「養育役割」として捉えられる「親準備性」の研究が行われてきたと述べている。また、その内容が①子どものイメージや子どもへの関心・感情など子どもに関するもの、②母親による子育てへの構え・育児観・性・結婚・夫婦の役割・育児についての意識と態度・性の受容など子育てに関するもの、③親志向性、母性意識、親への親和性、親への同一化など、親となることに関するものとしてとらえられていることを指摘した。さらに、岡本・古賀（2004）は、従来の「親準備性」は「養育役割」としてのみとらえられており、家庭における親に求められる資質はその他にもあることを指摘し、「養育役割」に加えて、家族の絆を高める役割や家事労働、介護の役割を含め、「子どもが将来、家庭を築き経営していくために必要な、子どもの養育、家事労働、介護を含む親としての資質、およびそれが備わった状態」と定義し、親準備性を測定する質問紙を作成し、青年の親準備性に影響を及ぼす心理社会的要因について検討している。その結果、親準備性として、養育役割・家族結合役割・家事労働役割・介護役割の4つの因子が見出され、青年の親準備性の発達に影響を及ぼす要因として、性別、父親・母親イメージ、家庭での手伝い体験、子ども・高齢者についての学習・ふれあい体験が挙げられることが示唆された。

岡野（2003）は、青年期女子の親準備性の獲得には、子どもに対して良好なイメージをもつことが重要であると指摘している。さらにそのような子どもイメージの形成には、自分が育った家庭生活や家族や友人との安定的な人間関係を持っていることや、乳幼児との接触体験が多いことが関連しているのではないかと仮定し、質問紙調査を行った。その結果、乳幼児との接触体験や、身近な人間との良い関係が良好な子どもイメージの形成と深く関連することが明らかになった。

岩治（2009）は、「親になること」について、「育児性」、「養護性」や「親準備性」といった観点から研究がなされていると述べ、いずれも子どもの健全な発達に関わる重要な資質であり、親になるまでの意識の形

成をたどる上で重要な指標であるとしている。また、これまで親になる準備段階に関する研究において使われてきた概念のほとんどが「親準備性」であるが、この概念を用いると親になることが身近に迫った時期の意識しか追うことができないという問題点を指摘している。一方、「養護性」とは、小嶋（1989）が「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」と定義するものである。この「養護性」の概念は、行動・構えの底に慈しみ育むところと技能があると考え、赤ちゃんや子どものみならず病人や老人、ペットや自然界の動植物も含めた広い視点でとらえることができ、さらに養育者としての成人だけがもつものではなく、幼児期から発達させていくものであり、実際に親になってからもその発達を終えるという生涯発達の視点でとらえることができるとしている。岩治（2009）は、青年期の大学生における「養護性」の構成要因を検討するとともに、養護性の発達に影響を与えらる愛着、社会的性役割観、きょうだいの有無、小さい子どもとの関わりや、世話経験の有無などの要因との関連について検討した。その結果、幼い子どもとの接触経験や保育に関する学習体験などが養護性を高める要因であることを明らかにした。

また、青年期以後の養護性については、糊澤・福本・岩立（2009）が、大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性へ及ぼす影響について検討しており、過去の養護体験は男子においては養護性形成にあまり影響を与えていなかったが、女子においては過去の被養護・養護体験が現在の養護性形成に強い影響を与えていることが示されている。

親となるための準備段階として、子どもや育児に対して良好なイメージを形成することや養護性の高さが重要だと考えられる。先行研究より、子どもや育児に対する良好なイメージの形成には、子どもとの接触経験が影響することが指摘されており、同時に養護性の発達にもまた子どもとの接触経験が影響することも示されている。そこで、礪波（2011）は、子どもとの接触経験が青年の子どもに対するイメージや育児イメージ、さらに養護性に影響を与えらる考え、女子大学生を対象に質問紙調査を行った。その結果、子どもとの接触経験の量が、育児の肯定的イメージや養護性に影響を与えていることや、子どもとどう関わりをしたのかによって、その影響は異なることが明らかにさ

れた。礪波（2011）は、女子大学生のみを対象に調査を行ったが、育児不安・育児ストレスといった育児にかかわる問題を考える際には、母親のみでなく父親の育児に対する関わりも重要であると考えられる。従って、いずれ父となる可能性のある青年男子についても子どもとの接触経験や、子どもイメージ、育児イメージ、養護性について検討する必要があるだろう。

本研究では、青年期の男女を対象として、養護性の発達や、子どもや育児に対する良好なイメージの形成に影響を与えらる要因について検討し、子どもとの接触経験の有無や、性別・年齢などとの関連について検討することを目的とする。

## 方 法

1. 質問紙 「1. フェースシート」「2. 子どものイメージ」「3. 乳幼児との接触経験」「4. 乳幼児への親和欲求」「5. 育児イメージ」「6. 養護性尺度」の6領域からなる質問紙を使用した。

第1のフェースシートでは、学年、性別、年齢、きょうだいに関する情報、身近にいる乳幼児に関する情報、保育実習体験について質問した。

第2の子どものイメージでは、子どもイメージの研究（井上・小林，1998；野村・河上・長谷・藤原，2007；岡田・中新・谷原，2006）を参考に、礪波（2011）の結果に基づき、4項目を削除し16項目を使用した。回答は7段階評定を使用した。

第3の乳幼児との接触経験では、佐藤（2004）と野村ら（2007）を参考に乳幼児の世話をした体験（「抱っこをする」「おむつを交換する」「お風呂に入れる」「泣いている子どもを寝かせつける」「遊び相手をする」など）10項目を用いた。回答は、「かなり経験がある」と「全く経験がない」を両極とする4段階評定を使用した。

第4の乳幼児への親和欲求では、野村ら（2007）で使用した「赤ちゃんや幼児が好き」「触れたい」「遊びたい」「守りたい」の項目に、新たに「世話をしたい」という項目を加えた5項目で、回答は「あてはまる」と「あてはまらない」を両極とする5段階評定を使用した。

第5の育児イメージでは、石松・江藤・山本（2004）を参考に「幸せな」「やりがいのある」などプラスイメー



ジ8項目,「束縛される」「大変な」などマイナスイメージ8項目の16項目を用い,回答は「あてはまる」と「あてはまらない」を両極とする5段階評定を使用した。

第6の養護性尺度では, 榎澤・福本・岩立(2009)が作成した養護性尺度のうち, 礪波(2011)の因子分析の結果を参考に25項目を使用した。回答は, 「全くあてはまらない」「とてもよくあてはまる」を両極とする6段階評定を用いた。

**2. 調査対象・時期・回収率** 新潟県の国立大学に在籍する大学生及び大学院生を対象に, 2012年7月に調査を実施した。授業の担当教員より授業時に150部質問紙を配布し109部回収し, 回収率は72.7%であった。回答に不備のある者を除き, 104名を分析対象とした(男性38名, 女性66名)。

## 結 果

### 1. 各得点の算出

#### (1) 子どもイメージ

乳幼児のイメージ16項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は4.06, 2.35, 1.91, 1.21, 0.94・・・というものであり, 4因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度4因子を仮定して

主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果, 十分な因子負荷量を示さなかった3項目を分析から除外し, 再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関をTable1に示す。なお, 回転前の4因子で13項目の全分散を説明する割合は64.35%であった。

第1因子は「にぎやかな」「わがままな」「落ち着きのない」「意欲的な」「はげしい」の5項目で構成されており, 「活動性」因子と命名した。第2因子は「良い」「好きな」「愉快的な」の3項目で構成されており「好感度」因子と命名した。第3因子は「優しい」「やさしい」の2項目で構成されており「柔軟性」因子と命名した。第4因子は「頼もしい」「きちんとした」「たくましい」の3項目で構成されており「自律性」因子と命名した。

子どもイメージの4つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し, 「活動性」得点(平均5.55,  $SD0.81$ ), 「好感度」得点(平均5.69,  $SD1.11$ ), 「柔軟性」得点(平均4.97,  $SD1.14$ ), 「自律性」得点(平均3.43,  $SD0.94$ )とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出したところ, 「活動性」で $\alpha = .73$ , 「好感度」で $\alpha = .84$ , 「柔軟性」で $\alpha = .73$ ,

Table 1 子どもイメージの因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

因子名	質問項目	I	II	III	IV
I 活動性	にぎやかな - 静かな	-.68	.00	.09	.08
	思いやりのある - わがままな	.65	-.17	.17	.25
	落ち着いた - 落ち着きのない	.61	.18	-.01	.13
	意欲的な - 無気力な	-.58	-.09	.08	.24
	おだやかな - はげしい	.51	-.13	.12	-.11
II 好感度	良い - 悪い	.15	.85	-.06	.02
	好きな - 嫌いな	-.07	.80	.04	.00
	愉快的な - 不愉快的な	-.14	.63	.22	.06
III 柔軟性	優しい - 厳しい	-.14	-.05	.94	-.05
	やさしい - こわい	.23	.16	.60	-.07
IV 自律性	頼もしい	-.12	-.02	-.03	.79
	きちんとした	.15	.04	-.04	.54
	たくましい - 弱々しい	-.13	.07	-.07	.40
因子間相関		I	II	III	IV
	I 活動性	1.00			
	II 好感度	-.37	1.00		
	III 柔軟性	-.18	.50	1.00	
	IV 自律性	.28	.03	-.02	1.00

「自律性」で  $\alpha = .55$  であった。「自律性」では  $\alpha$  係数は多少低いが、下位尺度の項目の安定性を考慮し、この得点を用いる。

(2) 乳幼児との接触経験

乳幼児との接触経験について、「おむつ交換をする」「トイレの世話をする」「ミルクを飲ませる」「お風呂に入れる」の4項目を「身の世話」経験、「衣服を着替えさせる」「子どもを寝かしつける」「半日以上一人で世話をする」の3項目を「日常的な世話」経験、「遊び相手をする」「抱っこをする」「泣いている子どもをなだめる」の3項目を「子守り」経験として分類した。各カテゴリーに相当する項目の平均値を算出し、「身の世話」得点 (平均 1.86,  $SD0.91$ ), 「日常的な世話」得点 (平均 3.02,  $SD0.87$ ), 「子守り」得点 (平均 2.45,  $SD0.88$ ) とした。

内的整合性を検討するために各カテゴリーの  $\alpha$  係数を算出したところ、「身の世話」で  $\alpha = .90$ , 「日常的な世話」で  $\alpha = .87$ , 「子守り」で  $\alpha = .89$  と十分な値が得られた。

(3) 乳幼児への親和欲求

乳幼児への親和欲求について、「好き」を除き、積

極的に乳幼児に関わりたい意志を示す「触れたい」「遊びたい」「守りたい」「世話をしたい」の4項目の得点の平均点を、親和欲求得点とした (平均 4.31,  $SD0.80$ )。

(4) 育児イメージ

育児イメージ 16 項目について、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。固有値の変化は、5.18, 3.09, 1.13, 1.01... というものであり、3 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 3 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった 1 項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を Table2 に示す。なお、回転前の 3 因子で 15 項目の全分散を説明する割合は 61.20% であった。第 1 因子は「負担イメージ」、第 2 因子は「生きがいイメージ」、第 3 因子は「幸福イメージ」と命名した。

「負担イメージ」, 「生きがいイメージ」, 「幸福イメージ」に相当する項目の平均値を算出し、「負担イメージ」得点 (平均 3.62,  $SD0.66$ ), 「生きがいイメージ」得

Table 2 育児イメージの因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

因子名	質問項目	I	II	III
I 負担 イメ ージ	いらいらする	.83	-.25	.18
	束縛される	.62	.04	-.04
	大変な	.62	.14	.20
	面倒な	.61	-.06	-.24
	汚い	.57	-.15	-.12
	不安な	.53	.31	-.20
	忍耐力のいる	.41	.36	.29
II イ メ ジ 生 き が い	やりがいがある	.07	.90	-.11
	大切な	-.03	.80	.07
	心が癒される	-.23	.56	.16
	自分の成長になる	-.02	.51	.03
III イ メ ジ 幸 福	幸せな	-.02	.02	.83
	嬉しい	.00	-.01	.80
	楽しい	-.26	.02	.61
	愛情にあふれた	.15	.32	.44
因子間相関		I	II	III
I	負担イメージ	1.00		
II	生きがいイメージ	-.10	1.00	
III	幸福イメージ	-.21	.67	1.00

点（平均 4.38,  $SD0.59$ ）, 「幸福イメージ」得点（平均 4.34,  $SD0.62$ ）とした育児イメージの各因子の信頼性係数（Cronbach の  $\alpha$  係数）は、それぞれ「負担イメージ」 $\alpha = .78$ , 「幸福イメージ」 $\alpha = .80$  で、「生きがいイメージ」 $\alpha = .81$  で十分に高い内的整合性があつたといえる。

#### (5) 養護性

養護性尺度の 25 項目について主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。固有値の変化は、9.25, 2.95, 1.50, 1.25・・・というものであり、3 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 3 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかつた項目及び 2 つの因子に高い負荷量を示した項目の合計 8 項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を Table 3 に示す。なお、回転前の 3 因子で 17 項目の全分散を説明する割合は 57.16% であつた。第 1 因子は子どもに対するスキル

の自信を示す程度であり「幼い子どもに対する技能の認知」因子（以下、「技能」と、第 2 因子は幼い子どもに対する共感心を示す程度であり「幼い子どもに対する共感性」因子（以下、「共感性」と、第 3 因子は幼い子どもや子育てに対する関心を示す程度であり「幼い子どもや子育てに対する関心」因子（以下、「関心」と命名した。

養護性尺度の 3 つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「技能」得点（平均 3.11,  $SD0.83$ ）, 「共感性」得点（平均 4.02,  $SD0.84$ ）, 「関心」得点（平均 4.05,  $SD0.68$ ）とした。養護性尺度の各因子の信頼性係数（Cronbach の  $\alpha$  係数）は、それぞれ「技能」 $\alpha = .85$ , 「共感性」 $\alpha = .83$ , 「関心」 $\alpha = .85$  で、第 1 因子から第 3 因子まで十分な値が得られた。

Table 3 養育性尺度の因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

因子名	質問項目	I	II	III
I 技 能	幼い子どもをあきさせないで 30 分以上遊ばせることができる	.91	-.08	-.12
	大勢の子どもを相手にして遊ばせることができる	.73	.07	-.02
	幼い子どもがぐずっている時、うまくなだめることができる	.71	-.02	.12
	幼い子どもの世話には自信がある	.66	-.13	.08
	幼い子どもの話し相手になれると思う	.60	.22	.09
	今すぐにでも幼稚園の教師をやっていけそうな気がする	.49	.11	-.14
II 共 感 性	小さい子どもを見ても別にかわいいと感じない（逆転）	.18	-.81	.00
	幼い子どもが泣いていると何とかしてあげたいと思う	.01	.73	.00
	幼児の遊び相手になる自信はない（逆転）	-.31	-.70	.27
	幼い子どもはあまり好きになれない（逆転）	.12	-.67	-.18
	子どもが不安そうな顔をしているときは、不安を取り除いてあげたい	-.01	.50	.38
III 関 心	自分は子どもを育て、よい親になろうと思っている	-.16	-.07	.83
	子どもが遊んでいるのを見てると楽しくなる	.01	.23	.72
	子どもの心の動きに興味がある	-.04	.06	.69
	自分は将来我が子に慕われる親になれるような気がする	.32	-.39	.59
	子どもが好きなほうだと思う	.14	.29	.49
	幼い子どもの瞳にひきつけられるものを感じる	.20	.19	.45
	テレビの小さい子どもが出てくると興味をもってみる	.07	.18	.44
	因子間相関	I	II	III
	I 技 能	1.00		
	II 共感性	.36	1.00	
	III 関 心	.60	.64	1.00

## 2. 年の離れた弟妹・身近な子ども・保育実習経験の有無による各得点の差

5歳以上年の離れた弟妹の有無, 3歳以下の身近な子どもの存在の有無, 保育実習経験の有無により, 親和欲求, 接触経験, 子どもイメージ, 育児イメージ, 及び養護性得点に差が見られるかを検討するため独立の  $t$  検定を行った。結果を Table4 に示す。(以下,  $t$  値などは Table4 に示して本文では統計数字を省略する。)

### (1) 年の離れた弟妹の有無

5歳以上年の離れた弟妹がいる群の方がいない群よりも, 親和欲求, 「日常的世話」「子守り」経験と, 子どもイメージ「好感度」, 養護性「共感性」「関心」が有意に高かった。年の離れた弟や妹がいる群では, 弟妹の養育の手伝いをする事が多く, 子どもに対する共感や関心が高くなっていったといえる。しかし, 好感度を除く子どもイメージや育児イメージについては有意な差はみられなかった。

### (2) 身近な子どもの存在の有無

身近に3歳までの子どもがいる群の方がいない群よりも, 「身近の世話」「日常的世話」「子守り」の経験が有意に多く, 子どもに対する「自律性」イメージが有意に高かった。身近に幼い子どもがいると, 子どもとの接触経験が多く, また子どもに対しても比較的しっかりしているというイメージをもつといえる。その他の得点には有意な差はみられなかった。

### (3) 保育実習等の経験の有無

中学校・高校時代の保育実習の経験のある群とない群では, すべての項目において有意な差はみられなかった。

## 3. 子どもとの接触経験の多少による各得点の差

過去の子どもの接触経験について, 平均点(身近の世話 1.86点, 日常的世話 2.17点, 子守り 3.03点)をカットポイントとして接触経験(身近の世話・日常的世話・子守り)得点が低い群と高い群に分けた。

子どもとの接触経験得点の高低により, 親和欲求, 接触経験, 子どもイメージ, 育児イメージ, 及び養護性得点に差が見られるかを検討するため独立の  $t$  検定を行った。その結果を Table5 に示す。(以下,  $t$  値などは Table5 に示して本文では統計数字を省略する。)

「身近の世話」経験の多い群の方が少ない群よりも,

有意に子どもに対する「親和欲求」が高く, さらに養護性「技能」が高かった。

「日常的世話」経験が多い群の方が少ない群よりも, 子どもに対する「親和欲求」が高く, 育児に対する「負担イメージ」が低く, 養護性「技能」「関心」が有意に高かった。

「子守り」経験が多い群の方が少ない群よりも, 子どもに対する「親和欲求」が高く, 子どもに対する「好感度」「柔軟性」が高く, 育児に対する「生きがいイメージ」「幸福イメージ」が高く, 養護性「技能」「共感性」「関心」が高かった。

以上の結果より, 子どもとの接触経験の中でも, 特に, 遊び相手をする・泣いている子どもをなだめる・抱っこをするといった「子守り」経験の量が, 子どもへ関わりたいという欲求や, 子どもに対するイメージ, 育児に対する肯定的なイメージ, さらに養護性全般に影響を与えていることが明らかになった。

## 4. 性別・年齢による各得点の差

20歳以下の調査対象者を低年齢群(平均 19.3歳 SD0.5), 21歳以上の調査対象者を高年齢群(平均 22.8歳 SD1.9)に分け, 各下位尺度得点および接触経験について, 2(性別)×2(年齢)の分散分析を行った。結果を Table6 に示す。(以下,  $F$  値などは Table6 に示して本文では統計数字を省略する。)

その結果, 年齢の要因について, 子どもイメージの「柔軟性」得点, 「自律性」得点, 育児イメージの「生きがいイメージ」得点, 「幸福イメージ」得点, 養護性の「技能」得点において要因の効果が有意であり, いずれも 21歳以上の群の方が 20歳以下の群よりも得点が高かった。年齢が高い方が子どもに対してやさしいというイメージやしっかりしているというイメージをもち, 育児に対しても生きがいや幸福といった肯定的なイメージを抱き, 子どもに対するスキルに自信があったといえる。

性別の要因について, 子どもイメージの「好感度」得点, 育児イメージの「幸福イメージ」得点, 養護性の「関心」得点および親和欲求得点において要因の効果が有意であり, いずれも女子の方が男子より高いことが明らかになった。女子の方が男子より, 子どもに対する親和欲求が強く, 子どもに対する好感度が高く, 育児に対する幸福なイメージが強く, 子どもに対する

Table 4 年の離れた弟妹・身近な子ども・保育実習経験の有無別の各種得点の差

	年の離れた弟妹			身近な3歳以下の子ども			保育実習経験			
	有	無	t 値	有	無	t 値	有	無	t 値	
親和欲求	4.64 (0.47)	4.20 (0.85)	-2.54*	4.44 (0.82)	4.27 (0.82)	-0.91	4.32 (0.93)	4.30 (0.67)	-0.16	
接触経験	身辺の世話	2.15 (0.97)	1.76 (0.88)	-1.95	2.26 (1.07)	1.73 (0.83)	-2.54*	1.81 (0.84)	1.90 (0.98)	0.47
	日常的世話	2.55 (0.93)	2.03 (0.98)	-2.41*	2.63 (1.17)	2.02 (0.88)	-2.73**	2.20 (0.91)	2.12 (1.06)	-0.43
	子守り	3.37 (0.74)	2.90 (0.88)	-2.44*	3.49 (0.79)	2.88 (0.85)	-3.12**	3.03 (0.81)	3.01 (0.93)	-0.16
子どもイメージ活動性	活動性	5.66 (0.83)	5.51 (0.80)	-0.81	5.69 (0.82)	5.51 (0.81)	-0.97	5.41 (0.86)	5.68 (0.74)	1.74†
	好感度	6.06 (0.83)	5.56 (1.17)	-2.03*	5.85 (0.95)	5.64 (1.16)	-0.81	5.66 (1.13)	5.71 (1.11)	0.23
	柔軟性	4.71 (1.03)	5.06 (1.16)	1.35	5.19 (1.22)	4.91 (1.11)	-1.06	5.00 (1.17)	4.95 (1.11)	-0.20
	自律性	3.55 (1.02)	3.39 (0.91)	-0.74	3.81 (0.79)	3.32 (0.96)	-2.26*	3.43 (0.90)	3.43 (0.99)	-0.02
育児イメージ	負担イメージ	3.52 (0.69)	3.65 (0.66)	0.88	3.49 (0.75)	3.65 (0.64)	1.03	3.55 (0.65)	3.68 (0.68)	1.00
	生きがいイメージ	4.51 (0.49)	4.33 (0.61)	-1.32	4.47 (0.53)	4.35 (0.60)	-0.89	4.40 (0.59)	4.36 (0.59)	-0.33
	幸福イメージ	4.45 (0.50)	4.30 (0.65)	-1.05	3.55 (0.62)	3.85 (0.61)	-2.30	4.37 (0.61)	4.32 (0.64)	-0.37
養護性	技能	3.38 (0.83)	3.02 (0.82)	-1.90	3.34 (0.85)	3.05 (0.82)	-1.53	3.08 (0.86)	3.15 (0.82)	0.43
	共感性	4.48 (0.53)	3.86 (0.87)	-3.46***	4.29 (0.68)	3.94 (0.87)	-1.77†	3.93 (0.95)	4.09 (0.74)	0.93
	関心	4.37 (0.53)	3.94 (0.69)	-2.88**	4.10 (0.74)	4.04 (0.67)	-0.40	4.03 (0.79)	4.07 (0.58)	0.32
人数 (n)	26	76		26	78		48	55		

\*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$  † $p < .10$ 

Table 5 各種接触経験の高低による各種得点の差

	身辺の世話			日常的世話			子守り			
	高	低	t 値	高	低	t 値	高	低	t 値	
親和欲求	4.55 (0.71)	4.12 (0.82)	-2.79**	4.62 (3.98)	3.98 (0.92)	-4.42***	4.72 (0.41)	3.98 (0.89)	-5.18***	
子どもイメージ活動性	活動性	5.48 (0.80)	5.64 (0.80)	1.02	5.43 (0.80)	5.67 (0.82)	1.51	5.59 (0.86)	5.51 (0.78)	-0.49
	好感度	5.82 (1.05)	5.57 (1.18)	-1.11	5.83 (1.01)	5.53 (1.22)	-1.35	6.06 (0.96)	5.39 (1.16)	-3.15**
	柔軟性	5.19 (1.15)	4.81 (1.12)	-1.68†	5.12 (1.13)	4.83 (1.15)	-1.30	5.28 (1.20)	4.74 (1.04)	-2.47*
	自律性	3.43 (1.01)	3.41 (0.90)	-0.11	3.43 (0.94)	3.43 (0.97)	-0.01	3.34 (0.99)	3.50 (0.92)	0.83
育児イメージ	負担イメージ	3.70 (0.68)	3.52 (0.64)	1.37	3.44 (0.66)	3.82 (0.62)	3.02**	3.52 (0.69)	3.72 (0.64)	1.54
	生きがいイメージ	4.41 (0.62)	4.35 (0.57)	-0.50	4.39 (0.58)	4.36 (0.61)	-0.33	3.73 (0.66)	4.24 (0.63)	-2.69**
	幸福イメージ	4.40 (0.65)	4.29 (0.60)	-0.92	4.45 (0.59)	4.24 (0.64)	-1.81	4.56 (0.46)	4.17 (0.69)	-3.25***
養護性	技能	3.47 (0.71)	2.82 (0.83)	-4.09***	3.55 (0.60)	2.66 (0.80)	-6.35***	3.55 (0.63)	2.76 (0.82)	-5.34***
	共感性	4.01 (0.96)	4.07 (0.72)	0.34	4.07 (0.89)	3.98 (0.81)	-0.54	4.26 (0.78)	3.83 (0.85)	-2.64**
	関心	4.16 (0.68)	3.96 (0.68)	-1.46	4.22 (0.63)	3.88 (0.70)	-2.55	4.25 (0.58)	3.89 (0.73)	-2.73**
人数 (n)	45	58		53	50		46	57		

\*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$  † $p < .10$



Table 6 子どもイメージ・育児イメージ・養護性の下位尺度得点、親和欲求、接触経験の性(2) × 年齢(2)の2要因分散分析結果

	年齢群			年齢	F 値 (df) 性	交互作用
	全体 (104 名)	20 歳以下 (58 名)	21 歳以上 (46 名)			
活動性得点 (子どもイメージ)						
男子 (38 名)	5.55 (0.78)	5.54 (0.92)	5.55 (0.68)	0.13 (1,100)	0.00 (1,100)	0.18 (1,100)
女子 (66 名)	5.54 (0.83)	5.61 (0.90)	5.47 (0.72)			
全体 (104 名)	5.55 (0.81)	5.57 (0.90)	5.51 (0.70)			
好感度得点 (子どもイメージ)						
男子 (38 名)	5.37 (1.20)	5.08 (1.19)	5.65 (1.17)	1.47 (1,100)	4.59 (1,100) *	1.71 (1,100) 女子 > 男子
女子 (66 名)	5.85 (1.04)	5.86 (1.01)	5.84 (1.11)			
全体 (104 名)	5.69 (1.18)	5.47 (1.12)	5.75 (1.13)			
柔軟性得点 (子どもイメージ)						
男子 (38 名)	5.03 (1.04)	4.82 (1.01)	5.24 (1.04)	3.98 (1,100) *	0.02 (1,100)	0.05 (1,100)
女子 (66 名)	5.00 (1.20)	4.74 (1.21)	5.26 (1.13)			
全体 (104 名)	4.98 (1.14)	4.78 (1.15)	5.25 (1.08)			
自律性得点 (子どもイメージ)						
男子 (38 名)	3.46 (0.99)	3.12 (0.89)	3.81 (0.99)	6.33 (1,100) *	0.07 (1,100)	1.22 (1,100)
女子 (66 名)	3.41 (0.92)	3.28 (0.86)	3.55 (1.00)			
全体 (104 名)	3.42 (0.94)	3.20 (0.86)	3.68 (0.99)			
負担イメージ得点 (育児イメージ)						
男子 (38 名)	3.75 (0.60)	3.72 (0.58)	3.78 (0.62)	0.00 (1,100)	2.35 (1,100)	0.13 (1,100)
女子 (66 名)	3.54 (0.70)	3.56 (0.67)	3.51 (0.75)			
全体 (104 名)	3.62 (0.67)	3.64 (0.65)	3.65 (0.70)			
生きがいイメージ得点 (育児イメージ)						
男子 (38 名)	4.25 (0.59)	4.09 (0.67)	4.42 (0.49)	4.37 (1,99) *	2.79 (1,99) †	0.40 (1,99)
女子 (65 名)	4.45 (0.58)	4.37 (0.64)	4.54 (0.48)			
全体 (103 名)	4.37 (0.59)	4.23 (0.65)	4.48 (0.48)			
幸福イメージ得点 (育児イメージ)						
男子 (38 名)	4.09 (0.69)	3.99 (0.79)	4.20 (0.61)	4.84 (1,99) *	12.39 (1,99) ***	0.17 (1,99) 女子 > 男子
女子 (65 名)	4.52 (0.53)	4.36 (0.55)	4.68 (0.45)			
全体 (103 名)	4.34 (0.62)	4.17 (0.65)	4.44 (0.57)			
技能得点 (養護性)						
男子 (38 名)	3.10 (0.90)	2.84 (0.82)	3.37 (0.91)	6.46 (1,97) *	0.06 (1,97)	0.25 (1,97)
女子 (63 名)	3.15 (0.80)	2.97 (0.80)	3.32 (0.77)			
全体 (101 名)	3.11 (0.84)	2.91 (0.80)	3.34 (0.83)			
共感性得点 (養護性)						
男子 (38 名)	3.81 (0.80)	3.61 (0.84)	4.00 (0.75)	0.89 (1,97)	3.57 (1,97) †	1.66 (1,97)
女子 (63 名)	4.14 (0.85)	4.10 (0.84)	4.10 (0.89)			
全体 (101 名)	4.02 (0.84)	3.89 (0.87)	4.05 (0.81)			
関心得点 (養護性)						
男子 (37 名)	3.85 (0.68)	3.78 (0.56)	3.93 (0.78)	1.38 (1,98)	5.50 (1,98) *	0.02 (1,98) 女子 > 男子
女子 (65 名)	4.18 (0.66)	4.09 (0.71)	4.27 (0.56)			
全体 (102 名)	4.05 (0.68)	3.93 (0.68)	4.10 (0.69)			
親和欲求得点						
男子 (38 名)	4.10 (0.76)	4.02 (0.73)	4.18 (0.80)	1.88 (1,100)	5.29 (1,100) *	0.13 (1,100) 女子 > 男子
女子 (66 名)	4.47 (0.80)	4.33 (0.91)	4.61 (0.56)			
全体 (104 名)	4.31 (0.80)	4.17 (0.87)	4.39 (0.70)			
身辺の世話 (接触経験)						
男子 (38 名)	1.83 (0.92)	1.78 (0.96)	1.88 (0.91)	0.79 (1,99)	0.18 (1,99)	0.13 (1,99)
女子 (65 名)	1.91 (0.91)	1.79 (0.93)	2.03 (0.89)			
全体 (103 名)	1.86 (0.91)	1.79 (0.93)	1.96 (0.89)			
日常的世話 (接触経験)						
男子 (38 名)	2.02 (0.93)	1.90 (1.00)	2.14 (0.88)	1.32 (1,99)	1.50 (1,99)	0.00 (1,99)
女子 (65 名)	2.27 (1.01)	2.16 (1.05)	2.39 (0.97)			
全体 (103 名)	2.17 (0.98)	2.03 (1.03)	2.27 (0.93)			
子守り (接触経験)						
男子 (38 名)	2.93 (0.95)	2.96 (1.01)	2.89 (0.92)	0.24 (1,99)	0.73 (1,99)	0.01 (1,99)
女子 (65 名)	3.08 (0.82)	3.13 (0.79)	3.03 (0.88)			
全体 (103 名)	3.03 (0.87)	3.05 (0.86)	2.96 (0.89)			

\*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$  † $p < .10$

関心が強かったといえる。

一方、すべての得点において、性別×年齢の交互作用は有意でなかった。

## 考 察

### 1. 子どもとの接触経験の影響

本研究の結果、身近に幼い子どもがいる、またはいた人は、子どもに対してより良いイメージを与え、子どもに対する共感性や関心が高いことが示された。小さい子の世話の有無により養護性の「子ども・赤ちゃんへの関心」に差が見られたという岩治（2009）の結果と同様の結果であった。一方で、岩治（2009）では、中学・高校時期や大学における授業やボランティア・サークルでの幼児との関わりの有無により、礪波（2011）では保育実習等の経験の有無により、養護性に有意な差がみられたが、本研究の結果では、保育実習経験の有無は、子どもイメージ・育児イメージ・養護性に影響を与えていなかった。この結果は、本研究では年の離れた弟妹の有無や身近な3歳以下の子どもの有無により子どもとの接触経験に差が見られたが、保育実習経験の有無によって子どもとの接触経験に差がみられなかったことに関係すると考えられる。

子どもイメージや育児イメージ、さらに養護性には、幼い子どもに関わる機会があったかどうかではなく、実際にどの程度幼い子どもに関わったことがあるかが大きく影響するといえるだろう。

幼い子どもとの関わりについては、身近の世話や日常的世話、子守りの経験が多い人の方が少ない人よりも、子どもに対する親和欲求が高く、子どもを世話するスキルに自信があることが示された。一方で、子どもとの関わりの中では、抱っこする・あやすといった一般的な子守りの経験が、生きがいや幸福といった肯定的な育児イメージを強めていた。また、着替えや寝かしつけといった日常的世話の経験は、育児に対する負担イメージを弱めていた。身近の世話・日常的世話は、子どもイメージには影響を与えていなかったが、子守りの経験は、子どもに対する好感度や柔軟なイメージに影響を与えていた。

以上の結果は、岡野（2003）の結果と同様、子どもに対する良好なイメージや育児に対する肯定的なイメージの形成に、子どもとの接触経験が大きな影響を

与えることを支持するものであった。ただし、礪波（2011）の結果では、身近の世話といった一番たいへんな子どもとのかかわりが、子どもイメージや育児イメージ、養護性に影響を与えていたが、本研究の結果では、反対に、子守りといったより一般的で軽いかかわりが子どもや育児に対する良好なイメージ形成に影響を与えていた。この点に関しては、ひとつの解釈として、幼い子どもに対して比較的軽めのかかわりの方が子どもの良い面のみを体験できていたという可能性が考えられる。

### 2. 性別・年齢の要因

本研究の結果、男子より女子の方が、子どもイメージ「好感度」得点、育児イメージ「幸福イメージ」得点、養護性「関心」得点、「親和欲求」得点が高いことが明らかになった。女子は子どもに対する関心や関わりたいという思いが強く、子どもや育児に対して好感情を抱いているといえる。この結果より、性別により子どもに対する感情面に大きな差があったといえるが、一方で子どもイメージ「活動性」「柔軟性」「自律性」や養護性「技能」には性別による差がみられず、子どもに対する認知面・行動面にはそれほど性差はないという可能性も考えられる。さらに、子どもとの接触経験について有意な差は見られず、男女とも子どもと関わる機会には差がなかったといえる。

榎澤ら（2009）は、女子は男子より養護性が高いこと、また女子の場合、過去の体験が養護性形成に影響を与えているが、男子の場合あまり影響を与えていないことを明らかにしている。また男子については、過去の体験に影響されるよりもその場の状況から判断し発揮される養護性もあるという可能性を示しており、女子については、過去の養護体験が現在の養護性形成に強く影響しており、幼少のころから「育てる」ことを意識づけられている結果といえると指摘している。

本研究の結果では直接因果関係を示すことはできないが、男女ともに子どもに対する接触経験の程度には差がみられないが、子どもイメージ、育児イメージや養護性には差が見られたことは、男女で過去の体験が現在の養護性に与える影響が異なるという榎澤ら（2009）の結果を支持するものと考えられる。

また、20歳以下の人たちよりも21歳以上の人たちの方が、子どもイメージ「柔軟性」「自律性」得点、

育児イメージ「生きがいイメージ」「幸福イメージ」得点、養護性「技能」得点が高かった。この結果は、年齢が上がると、認知面で良好な子どもイメージを抱き、育児に対しても肯定的イメージを持ち、子どもに対する技能も身につけていると考えるようになることを示している。

性別は主に子どもに対する感情に、年齢は主に子どもや育児に対する認知や行動に影響を与えて可能性が示唆されたといえる。

### 3. まとめと今後の課題

本研究では、青年期の比較的幅の広い年齢層の男女を対象に、子どもイメージ、育児イメージ、養護性、親和欲求、子どもとの接触経験について測定し、養護性の発達や子どもや育児に対する良好なイメージの形成に影響を与えると考えられる要因として、子どもとの接触経験の有無や、性別・年齢などとの関連について検討した。

その結果、子どもとの接触経験は、良好な子どもイメージや育児イメージの形成や養護性の高さに影響することを明らかにした。特に、子どもとの接触経験の中でも子守りといった比較的軽い関わりが、全般的に大きな影響を与えていることが示された。

また、女子は男子よりも子どもや育児に対して肯定的な感情を抱いていることが示され、性差は子どもに対する感情面で顕著であったといえる。

一方で、青年期後期以後の人の方が青年期前期にあたる人よりも、子どもや育児に対して肯定的な認知を行っていたが、子どもに対する感情面では年齢による差はみられなかった。年齢が上がると共に、子どもに対する認知面でのイメージは良くなると考えられる。

性別・年齢による差についての本研究の結果は、本調査で「子どもイメージ」「育児イメージ」「養護性」「親和欲求」として測定していたものを、子どもに対する認知、子どもに対する感情、子どもに対する行動といった枠組みで捉え直す必要があることを示唆している。

今後さらに調査対象者を増やし、性別・年齢別に、子どもイメージ、育児イメージ、養護性、親和欲求、接触経験との関連について検討していきたい。

### 引用文献

- 荒牧美佐子・無藤 隆 (2008) 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い—未就学児を持つ母親を対象に— 発達心理学研究, 19 (2), 89-97.
- 原田正文 (2006) 子育ての変貌と次世代育成支援 名古屋大学出版会.
- 井上正明・小林利宣 (1985) 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究, 33 (3), 253-260.
- 伊藤葉子 (2003) 中・高校生の親準備性の発達 日本家政学会誌, 54 (10), 801-812.
- 岩治まとか (2009) 大学生における養護性の検討 東京家政大学研究紀要, 49 (1), 133-142.
- 小嶋秀夫 (1989) 養護性の発達とその意味 小嶋秀夫 (編) 乳幼児の社会的世界, pp.187-204, 東京: 有斐閣.
- 厚生労働省 (2010) イクメンプロジェクト [http://ikumen-project.jp/project\\_about.html](http://ikumen-project.jp/project_about.html) 2010/6 作成 2012/9/20 閲覧
- 厚生労働省 (2012) 子ども虐待による死亡事例等の検証結果 (第8次報告の概要) 及び児童虐待相談対応件数等 <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002fxos.html> 2012/7/26 作成 2012/9/20 閲覧
- 榎澤令子・福本 俊・岩立志津夫 (2009) 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性 (nurturance) へ及ぼす影響 教育心理学研究, 57, 168-179.
- 桑名佳代子・桑名行雄・細川 徹 (2008) 1歳6か月児をもつ親の育児ストレス (2) 両親間における育児ストレスの関連 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 57 (1), 339-358.
- 野村幸子・河上智香・長谷典子・藤原千恵子 (2007) 子どもとの接触体験からみた看護学生の子どものイメージ 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌, 7 (1), 169-180.
- 岡田恵子・中新美保子・谷原政江 (2006) 医療保育科学生と看護科学生における入学時の子どもイメージの比較 川崎医療福祉学会誌, 16 (1), 179-183.
- 岡本祐子・古賀真紀子 (2004) 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析 広島大学心理学研究, 4, 159-172.

岡野雅子（2003）青年期女子の子どもに対するイメージ—彼女たちを取り巻く人間関係と親準備性獲得の課題との関連— 日本家庭科教育学会誌, 46（1）, 3-13.

大日向雅美（2000）母性愛神話の罨 日本評論社.

礪波朋子（2011）女子大学生の乳幼児との接触経験と育児イメージ及び養護性との関連 京都光華女子大学研究紀要, 49, 13-15.

## 謝 辞

本調査にご協力いただきました上越教育大学の大前敦巳先生と学生の皆様に心より御礼申し上げます。